



高齢者への GLP-1 受容体作動薬の処方 ～家族介助の依頼を迷うケース～

おもろまちメディカルセンター

國吉真子¹⁾ / 前盛稚子¹⁾ / 小橋川健枝¹⁾ / 大城 讓^{2)*}

糖尿病治療薬 GLP-1 受容体作動薬は、膵臓ランゲルハンス島に働き、 β 細胞ではインスリン分泌を促し、 α 細胞ではグルカゴン分泌を抑制することを主な機序として血糖降下作用を示す¹⁾。

GLP-1 受容体作動薬には経口剤と注射剤があり、また、注射剤には daily 製剤と weekly 製剤がある。今回、daily 製剤と weekly 製剤を選択するにあたり参考となると思われるケースを経験したので報告する。

症例：2 型糖尿病（70 歳代・男性）

症例は高齢 2 型糖尿病患者で、十分な血糖コントロールが得られていないことから、注射剤の GLP-1 受容体作動薬を導入することとし、また、患者の負担軽減を考え、weekly 製剤を勧めることとした。

しかし、「週 1 回では忘れそうだ」との患者申し出があった。カレンダーや手帳にメモする等の対応を提案したが、そもそも患者自身に、これまでそのようなかたちで日々のスケジュール管理をする習慣がなかった。そこで、患者家族（息子）に注射管理を委ね、注射の日を確認してもらうこととし、weekly 製剤を開始することとした。ところが、次の診察でアドヒアランスの確認を行ったところ、患者から「息子にはまだ相談していない」と、うかない顔で告げられた。

患者には、若い頃から家族のために働き、子供達を一人前に育ててきたとの自負があった。現在、足腰は弱くなり、物忘れも生じてきたが、家族に対し

て、なお、「気丈な父親でありたい」という、患者の矜持が察せられた。

患者は、以前なら難なくできた週に 1 回の注射を覚えられないことが、自分自身で情けなく思われていた。処方する側は、「介助者（家族）の助けを借りればよい」と簡単に考えがちであるが、やはりその家族を大黒柱として長年支えてきたという自負がある患者にとって、「物忘れて弱くなった父親」を家族にさらけ出すことは、大きな重荷であることを感じ取ることができた。

こうした経緯を経て、GLP-1 受容体作動薬の注射剤を、weekly 製剤から daily 製剤へ変更することとした。毎日の注射自体は患者の負担増となると思われるが、これにより患者は自己管理が可能になり、家庭における父親としての面目が保たれることになった。

*

医療者は、投薬回数の減少や家族の協力を得ることが、すなわち患者自身の負担の軽減につながると単純に考えがちであるが、家族における患者の位置づけや気持ちのありように少なくない変化が生じることも念頭におき、治療法の選択はなされるべきであると、考えさせられたエピソードであった。

文 献

- 1) 大城 讓：末期腎不全では DPP-4 阻害剤よりも GLP-1 受容体作動薬を選ぶべきか：最新研究より。総合診療 33: 341-2, 2023

1) 薬剤部 2) 内科

*：責任著者（おもろまちメディカルセンター 糖尿病内科 部長；〒900-0011 沖縄県那覇市上之屋 1-3-1）